

万国博覧会と皇室外交

—伏見宮貞愛親王と1904年セントルイス万博—

The World Exposition and Imperial Diplomacy:
Prince Fushimi and Louisiana Purchase Exposition in St. Louis in 1904

楠元町子
KUSUMOTO, Machiko

1. はじめに

本稿は万国博覧会に果たした皇室の役割を明らかにするものである。2005年3月25日から9月25日まで日本で開催された愛知万博でも、日本国際博覧会名誉総裁に皇太子殿下が就任され、スペインのフェリペ皇太子とレティシア皇太子妃殿下、ネパールのパラス皇太子、フランスのシラク大統領など万博会場を訪れた多くの皇族や元首と親交を深められた。

1851年英国のロンドンで初めて開催されて以来、万国博覧会は最先端の科学技術や各国の文化を展示するだけでなく、開催国及び参加国の国威や国際関係を表象する場でもあった。そのため参加国の皇族や元首が自国の産業をアピールするとともに、開催国との関係を良好にする目的を持ち万博会場を訪問し、万博は社交場としての重要な役割を果たしていた。

日露戦争の最中に開催されたセントルイス万国博覧会は、戦争の正当性への理解と日本への同情を獲得し、米国の日本に対する好意的中立を得るために皇族の伏見宮貞愛親王が派遣された。日本政府は当初有栖川宮威仁親王（1862-1913）同妃殿下を天皇の代理として渡米させる準備をしていたが、有栖川宮威仁親王の病気により同じ四親王家¹⁾であった伏見宮貞愛親王（1858-1923）に差遣の命が下った。伏見宮貞愛親王は、日露戦争の激戦地から1904（明治37）年7月に帰国したばかりであったが10月23日に横浜を立ち、11月19日から24日までセントルイスに滞在し万博会場を見学し、ルーズベルト大統領をはじめ多くの米国の高官と交流を深めた。

本稿は、東洋の小国が西洋列強の大国であるロシアと対等に戦端を開いた日露戦争の最中に開催された1904（明治37）年セントルイス万博に着目する。1894（明治27）年の日清戦争の勝利や1902（明治35）年の日英同盟の締結を背景に、西洋列強と同様に近代化された国という意識をもって万博に参加した東洋の小さな国日本が、万博においてどのような外交戦略を展開したのか、その実態を明らかにするものである。

セントルイス万博に関しては美術、教育、建築、オリンピック等の視点から近年多数の貴重な研究がなされている²⁾。セントルイス万博を外交から論じた主なる論文としては、久本と伊東の論文がある。久本は、「セントルイス万博と清末中国」³⁾で初めて正式に万博に参加した中国の経緯と実態を、当時の中国の新聞雑誌から詳細に分析している。また伊東⁴⁾は「1904年セントルイス万博と日露戦時外交」と題された論文で、セントルイス万博の展示物や日本政府開催の祝宴を日露戦争との同時性から考察し、セントルイス万博を日本政府の対外宣伝活動の場と捉え、日本の考える戦争後の地域構想を戦争目的の延長線上にのせて対外的に表明するものであったと指摘している。しかし、皇族の果たした役割と米国側の資料に基づいての考察が不十分であると思われる。

本稿は、セントルイス公立図書館所蔵のセントルイス万博に関する新聞雑誌記事を集めたスクラップブックや日本政府のセントルイス万博に関する外交史料等の分析から、万博で行われた皇族による外交の実態を明らかにしたい。

2. セントルイス万博と天皇

1) 近代化と天皇

江戸時代に天皇はほとんど京都の御所から出ることなく、民衆にとって無縁の存在であった。そのため1868年1月3日（慶応3年12月9日）に王政復古を宣言し成立した明治政府の最優先の課題は、「天皇の存在を知らしめること、さらには天皇は民衆に見られ、自分を見せることを通じて民衆がほとんど意識しないうちに権力を行使して支配を強化することであった。」⁵⁾幕末の「見えない天皇」から明治の「見える天皇」へと、「天皇の視覚化」⁶⁾が、天皇が日本各地を視察して回る巡幸によって行われたのである。この「天皇の視覚化」を通じて、天皇が支配の象徴であり、権力のシンボルであることを民衆に知らしめた。外国に対しても「天皇の視覚化」が図られ、明治維新以降、天皇は来日した皇族、外交官に対して数々の会見や宮中での接待が行われた。

明治政府は、当時盛んに行われていた万博を日本の広報の場として捉え、万博への参加を通じて日本の近代化と日本の元首である天皇の存在を世界に印象付けようとした。明治政府のスローガンは「富国強兵」と「文明開化」であり、天皇はいち早く洋装を取り入れるなど「文明開化」を示し、一方では歴史と伝統の正統性の上に立つと同時に、他方では歴史の進歩を体現した存在であることを誇示した。

19世紀後半から20世紀にかけて、日本が世界の諸列強に参入しようと急速に近代化を図った時代であった。そのため日本の元首として天皇は、諸列強の皇帝と互換性を持つために多くの特性を急激に取り込まねばならなくなった。1871（明治4）年8月に従来の和服をやめて、洋服を採用するという「内勅」が出され、ヨーロッパ諸国の国王の軍服が調査され天皇の正服と軍服が決定されたが、正服も「燕尾形ホック掛」に金ボタンつまり軍服改良形

のものとして結実し、これは1872（明治5）年の行幸から採用された。やがて軍服が日常生活まで覆うことになった⁷⁾。1910（明治43）年に皇族身位令により皇太子、皇太孫を含む皇族男子の陸海軍武官への任官が原則として義務づけられたが、それ以前から皇族は陸海軍の武官として活躍し「天皇の軍隊」というイメージを広める役割を担っていた。

セントルイス万博中も伏見宮貞愛親王が天皇の代理として米国を訪れ、天皇と同様な軍服改良形の礼服姿と米国の人々との交流により日本の近代的イメージをアピールした。

2) 明治政府の外交交渉—有栖川宮威仁親王の訪米

セントルイス万博は、米国がフランスからルイジアナ州を購入してから百年を経過したことを記念して1904（明治37）年4月30日から12月1日にかけてミズリー州セントルイスで開催された。米国大統領マッキンレー（William McKinley 1843-1901）は、1901（明治34）年8月20日「ルイジアナ地方の購買記念祝賀に参同せんことを乞い、又各其代表者を選びてルイジアナ購買記念博覧会に派遣し且各其国の富源工業及文化の進歩を最もよく表彰する物品を出陣せられんことを希望せる」と宣言し、世界各国に参同の招聘を發した。

日本政府に対しての参加要請は、1901（明治34）年8月に米国駐在高平小五郎公使（1854-1929）を通して行われ、さらに同年10月に日本駐在米国特命全権公使が日本の外務大臣に参同出品並びに代表者の派遣を要請してきた。日本政府は1902（明治35）年10月に閣議を経て万博への公式参加を決定し、1903（明治36）年7月臨時博覧会事務局を設置し、同月事務局長手島精一は陳列場準備打合せのため渡米した。ロシアは日露戦争が勃発すると政府としての参加を取り消したが、日本は他の参同諸国が出品の陳列に手間取るなか、日本からの出品は万博会場前に滞りなく陳列され米国から感謝されるとともに、誠実で勤勉であるという日本人のイメージを形成する要因ともなった⁸⁾。

セントルイス万博の会場敷地面積1240エーカーは、1893（明治26）年シカゴ万博（633エーカー）の2倍、1900（明治33）年パリ万博（366エーカー）の4倍で、この史上最大の会場内に1576の建築物が建ち並んだ。参加国は、欧州から遠く離れた米国での開催であったが、1900（明治33）年パリ万博37カ国を上回る44カ国を数え、国内では47州3都市が参加した。

1903（明治36）年6月駐米公使高平が、外務大臣小村寿太郎（1855-1911）に他国の博覧会への参加状況を次のように報告し、日本政府に万博における皇族による他国との交流の重要性を訴えた。「欧州諸國中ニハ皇族ヲ以テ親シク談事業ヲ総裁セントスル向キ有之ヤノ伝説アリ他方ニハ清國ノ如キモ遠リ之レカ為メ倫貝子ヲ渡米セシムルノ内議有之ガ由ニ承及候⁹⁾ 有栖川宮威仁親王夫妻が天皇の代理として行くことになった。米国と日本の間で有栖川宮威仁親王の訪米に関して日程や警備の調整がなされ、1904（明治37）年3月12日付で、在米国特命全権公使高平から、外務大臣小村へ次のような経過報告が届いた¹⁰⁾。

「天皇陛下ニハ日米両國ノ親好御希望アラセラシ有栖川宮殿下ヲ米国ニ御派遣ノ上第一ニ

ハ親睦友好ノ御消息ヲ大統領ニ御傳致アラセラレ第二ニハ聖路易博覧会御観覧ノ御目的」と、有栖川宮威仁親王が妃殿下を御同伴して米国を訪問する目的を述べ、米国に「有栖川宮が高貴な地位にあり、天皇陛下が亡くなられた時は一国の元首となる方であるため強固な警備の準備を依頼したことや、大統領の招待を快諾し、殿下の渡米は博覧会の陳列が全て完了した6月以降、夏は過ごし難いので9月下旬から10月頃が好適であると通知したこと」を知らせてきた。

また天皇が両国の親睦を益々強固にしようと希望し、博覧会の好機に、最も御親近の皇族殿下を派遣しようとしたその大きな理由として、次のような米国の国内事情を杞憂しているからだと述べている。「日露ノ戦争ハ黄白両人種の戦ナルノモナラス基督教者ト異教者ノ争ナルヲ以テ白色ニシテ基督教ナル米国人ハ同人種同宗教ナル露国ノ戦勝ヲ不可不祈者ヲ論サン者モ有」を挙げ、大統領は両交戦国に対し不偏不党の態度であるが、米国内のアイランド人種は従来英国の政治に服さないからロシア寄りであり、ドイツ人種もロシア勝利を希望する者がいると指摘し、親露的政治家や前に述べた両人種の推戴を受けて大統領選挙に勝利したいため、目下我親王殿下を歓迎することによって彼らの反感を得るのではないかと心配していると思われる。

米国国務長官から「我親王殿下を歓迎してドイツ皇子ヘンリー親王の例に準じる接待をし、大統領主催の晩餐会を催す予定である。ヘンリー皇子の米国到着後大統領の探偵史二名を護衛としてつけ、狂妄者の暴行に配慮したので、もし有栖川宮威仁親王が日本から警備の者を随伴するなら探偵史と協議の上警備しても差し支えない。」と返事があった。さらに妃殿下への米国婦人間の交際饗応の都合や国務長官や大統領の予定を考慮すれば、有栖川宮威仁親王が10月中旬に日本を出発し、11月初旬に大統領と会うことがよいと提言していた。有栖川宮威仁親王の渡米に関しては、日本の外務省と米国の国務長官と綿密な打合せがなされ、米国の日本への配慮が伺われる。

1904（明治37）年4月30日のセントルイス万博の開会式に、天皇の代理として有栖川宮威仁親王同妃殿下が出席するという記事が、両殿下の肖像写真とともに米国の新聞に掲載された¹⁹⁾。この記事によれば、開会式の日程の問い合わせが3月に日本から米国にあったことから、有栖川宮威仁親王が開会式に出席することが判明したとし、「有栖川宮は、日本の王位継承権第二位で、天皇の甥であり天皇の後見人である。彼は40歳で日本海軍の副官の地位にあり、日中戦争の英雄である。」と紹介された。掲載された写真の有栖川宮威仁親王は礼装の軍服姿で、妃殿下は日本の皇族の礼装である十二単の着物姿であり、日本女性の優雅で神秘的雰囲気印象を米国人に与えた。しかし、諸事情により有栖川宮威仁親王同妃殿下の開会式の出席は見合わせる事となった。

1904（明治37）年8月になると高平公使は国務長官と有栖川宮威仁親王の接待を打ち合わせる必要から、親王が何日に日本を出発し、何日間米国の滞在するかを早急に知らせる事を求め、また国務長官の意向を次のように伝えている。「十月ハ當国ニ於テ最良ノ季節ナリ

尤モ大統領ハ十一月ニ至ラハ一層ノ余暇ヲ得テルヘシト雖トモ殿下ノ御到着カ選舉前タルト選舉御タルトハ大統領ニ取リテ格別ノ差異ナカルヘシ」¹²⁾ セントルイス万博が開催された1904（明治37）年は、日本にとっては日露戦争の最中であり、米国は4年に一度の大統領選の年であり、両国それぞれの国内事情を抱えていた。

3. 伏見宮貞愛親王とセントルイス万博

1) 米国訪問

1904（明治37）年9月有栖川宮威仁親王の健康に新たな問題が発生し、訪米に差し障りが少なくないと判断され、訪米する皇族が伏見宮貞愛親王に変わった。伏見宮貞愛親王殿下について、外務大臣小村から在米高平公使を通じて、次のように米国側に伝えられた。「伏見宮ハ有栖川宮ト同一地位の皇族ニアラセラレ現ニ陸軍大将ノ職ニ在リ過日戦場ヨリ凱旋セラレタル方ナリ」¹³⁾。

伏見宮は崇光天皇（1334-1398）を祖とし、明治維新後の十余宮家の内、梨本、山階、閑院、久邇、東久邇、小松、華頂、北白川、東伏見、賀陽、朝香、竹田の十二宮は何れも皆伏見宮の系統から出ている。そのため伏見宮は諸皇族の間で最も重きを置かれていた¹⁴⁾。伏見宮貞愛親王は1858（安政5）年4月28日に伏見宮邦家親王の長男として誕生した。1873（明治6）年陸軍幼年学校に入学し、1875（明治8）年陸軍士官学校に入学した。1885（明治18）年陸軍歩兵中佐の時欧州へ差遣された。1889（明治22）年には第3回内国勸業博覧会総裁に就任され、1894（明治27）年日清戦争において歩兵第四旅団長として旅順及び威海衛等を歴戦した。1896（明治29）年天皇陛下の御名代として露国皇帝陛下の戴冠式に参列した。日露戦争では1904（明治37）年第一師団長として出征し、南山の役で大活躍し、同年陸軍大将に昇進した。後年伏見宮貞愛親王の訪米については、「我が国よりも出品多く、親王の米国御差遣は主として該博覧会に臨み我が海外貿易発展に資する所あらしめんが為なるべしと雖も軍国多事の秋、陸軍大将の重職に在らせらるる親王をして特に此任に当ら給へるは、日米両国の親交に重きを措かせらるる深遠なる思召に因る」¹⁵⁾と評された。

1904（明治37）年10月23日伏見宮貞愛親王は、随員公使兼別当心得佐藤愛麿、伯爵寺島誠一郎、皇族附武官三原三郎、式武官渡邊直達、医師六角健吉、宮内省外事課勤務時岡茂弘、家従三木須賀麿を従え、当時太平洋航路の汽船中最大であったマンチュウリア号で横浜を出発した¹⁶⁾。マンチュウリア号は11月2日ホノルル港に寄航し、4日にハワイを出港し、9日に米国サンフランシスコに到着した。サンフランシスコでは、米国海軍が21発の皇礼砲を放って伏見宮貞愛親王に敬意を表し、日本の領事や公使館員、在留民等の奉迎を受けた。伏見宮貞愛親王は10日サンフランシスコからオークランドまで船で行き、オークランドから汽車でワシントンに向けて出発し、14日に到着した。その間サクラメント、オクデン、シアエンを通過したが、どの駅の停車場にも数百人の在留邦人が集まり、小さな日本国旗

を手に万歳を三唱するなど伏見宮貞愛親王を歓迎した¹⁷⁾。

2) ルーズベルト大統領との接見

1904(明治37)年11月14日伏見宮貞愛親王のワシントン到着時には、「大統領ルーズベルト(Theodore D. Roosevelt, 1858-1919)は國務第三次官ハーバート エッチ ディ バースを名代として接伴員工兵大佐サイエンスと共に親王を停車場に奉迎せしめ又我が公使館書記官日置、海軍中佐竹下勇、男爵金子堅太郎、臨時博覧会事務官手島精一、ニューヨーク総領事内田定槌等奉迎せり。」¹⁸⁾ 在米高平公使が病気のため、日置書記官が在米臨時代理公使を務め、外務大臣小村にワシントンにおける伏見宮貞愛親王とルーズベルト大統領の対面を以下のように報告している¹⁹⁾。

11月15日伏見宮貞愛親王は正装で大統領と接見し、「殿下十一月十四日華盛頓御着 十五日午前十時殿下ハ大統領ニ御対面アラセラレタリ其御模様ハ極メテ親密ニシテ萬事好都合ナリキ」と親王の様子を伝えた。親王がルーズベルト大統領に米国の親王に対する手厚い接待に感謝の意を表するとともに「我が天皇陛下が聖路易に於て壯観を呈せる各国の學術、工業進歩の状況を親しく視察せしめんが為め特に予を貴國に派遣せられたること(中略)ペリー提督來朝以來常に帝國と大共和國とを連結し、且つ帝國の進歩繁榮に鮮なからず貢獻したる友誼良好の關係、歲月の経過と共に益々親密強固に赴かんことを陛下に於て切望せらるる旨、貴大統領に伝ふべきことを予に命ぜられたり」²⁰⁾と天皇の言葉を伝えた。

ルーズベルト大統領は、伏見宮貞愛親王に対して次のように返礼した。「日本帝國が當國の招引に依り近世の発達と世界の進歩に参加せる以來、其結果今日の隆盛を見るに至り、貴我兩國の關係は絶えず友情を保って今日に至れり。(中略)殿下の渡來が當共和國と日本帝國との厚誼を増進するに至るべきを信ず。」²¹⁾その後、親王はフロックコートで陸海軍両長官及び、墨國、澳洪國、佛國、英國、獨國、伊國の六大使館を歴訪した。

午後3時、親王宿泊の御旅館でルーズベルト大統領の答訪を受けられた。大統領は秘書官ローブ、侍従武官二名を帯同して、親王と凡そ20分間御対談なされ、芸術、武士道、日本文学詩歌等に興味あると話された後極秘であると前置きし、次のように語った。「今回日露ノ戦争ニ関シ國民一般ハ勿論余ノ同情ハ挙ケテ日本ニアリト」²²⁾。

この大統領の答訪は、多くの困難が生じていた。当地の前例では先年ドイツヘンリー親王が公然の資格をもって当地に来られた時以外、大統領が外国皇族の訪問に対し答訪することはなかった。高平公使が種々苦心の結果、遂に殿下の御旅館に答訪することになった。また、日程の実行に際し特に困難だったのは、外交団御接見であった。欧米各国に於いて外国の皇族公然の資格を以て御來着の場合、外交団は進んで訪問することになっていた。当時米国における外交団長が露國大使であったが、日露戦争の最中でもあり、差し障りが生じたため、露國大使に次いで古参である墨國が露國の代わりとなった。その夜、ルーズベルト大統領は伏見宮貞愛親王のためホワイトハウスで晚餐会を催し、歓待甚だ極め、宴後更に親王及

び随員一同を東大広間に誘い、談笑した。晚餐会には墨、伊、奥、佛、英、獨の六カ国大使が招かれ、親王の服装は大礼服であった。

11月16日午前中議事堂及び書籍館御観覧し、午後1時30分國務長官が殿下のために午餐会を開いた。殿下はフロックコートの装いで同日午後4時から6時の間宿泊先の「アーリングトンホテル」で各国外交官を接見した。翌17日、ワシントン（George Washington）夫妻の墓に献花し、植樹した。午後7時半殿下のために「アーリングトンホテル」で日本代理公使による晚餐会が開かれた。伏見宮貞愛親王は18日セントルイスに向けて出発された。

新聞社の依頼に応じて、佐藤伏見宮別当はワシントン出発前に、伏見宮貞愛親王の言葉を以下のように発表した²³⁾。

「伏見宮殿下當国御来着以来米當国人ハ至ル所殿下ニ対シ好意ヲ表シ歓待ヲ表シタルニ付殿下ハ深く御感動アラセラレタリ且目下ノ戦争ニ際シ當国人カ日本人ニ対シ誠實ナル同情ヲ寄セタルハ殿下ハ深く御満足アラセラル所ニシテ殿下ノ帯ヒサカラルル友誼好意ノ使命ハ現ニ両国間ニ存スル親交ノ關係ヲ一層強固ナラシムルニ於テ多少貢献スル所アル様殿下ニ於テ切ニ御希望アラセラル（中略）、當国御渡米ニ依リテ既ニ得ラル又今後得ラルヘキ十分ノ御満足ハ満州ノ野ニ於テ戦功ヲラサセラレタル場合ヨリモ遙ニ過クルモノアル旨仰セラレタリ」

3) セントルイス万博訪問

11月19日（滞在1日目）午後1時30分すぎに、100人以上のシルクハットにフロックコートの日本人と多数の白人が参集する中、陸軍大将の御略服姿の伏見宮貞愛親王がセントルイスに到着し、フランス万博総裁やセントルイス市長の出迎えを受けた。伏見宮貞愛親王は宿舎のバックinghamクラブで歓迎会に御出席された後、フランス総裁の提案を受けられて、ワシントンからの長旅の疲れを癒す間もなく、午後3時15分に宿舎を出発し万博会場へ向かわれた。その夜フランス総裁と万博役員に同伴され伏見宮貞愛親王と随行員は、特別なボーア戦争の催しを御覧になられた²⁴⁾。

伏見宮貞愛親王が駅から馬車に乗り御宿泊先バックinghamクラブに着かれる途中の行列は次のようであった。先導騎兵である馬車1号には博覧会総裁とセントルイス市長、馬車2号は騎兵に囲まれ、殿下、佐藤別当、三原少佐、馬車3号には探偵員、馬車4号には日置代理公使と手嶋事務局長、馬車5号にはベーツ万博役員、ライス万博役員、馬車6号には接待委員、馬車7号、8号には殿下随行員、馬車9号には帝国博覧会事務官、馬車10号には日本在留民代表者が乗車した²⁵⁾。この華やかな行列はセントルイス市民の注目を浴び、翌日の新聞に大きく車上の親王の写真が掲載された²⁶⁾。

11月20日（滞在2日目）は、日曜日で万博会場は閉鎖されていたが、フランス総裁は特別に美術館を開き御巡覧を請うたので、伏見宮貞愛親王は午後接待委員及び我事務官等の誘導で参観され、帰途市街巡覧し、其の夜イムペリアル劇場に臨まれた²⁷⁾。

11月21日（滞在3日目）伏見宮貞愛親王は、午前10時にホテルを3台の馬車で御出発され、製造業の宮殿の東側に到着され、日本庭園を訪問し、庭園内の金閣寺を模したパビリオンで在留邦人一同を拝謁し茶菓を賜った。昼食後は工業館、製造館、教育館、心芸館、米国政府館の建物を訪れた。その夜万博会場内の接賓館（ウェストパビリオン）でフランシス総裁は、伏見宮貞愛親王歓迎のため米国博覧会事務官、博覧会役員及び各国事務官長など60余名を招待して晩餐会を催した²⁸⁾。

フランシス総裁は「初め米国がルイジアナ購買記念博覧会の計画を世界に発表するや、人皆其規模の広大に過ぎ、到底成功すべからざるを請へり。然るに吾人は今既に其目的を達したり。是と等しく日本の一小国が四千万の人口を有し、十倍の人口、五十六倍の面積を有する一国と戦を交わるに至るや、人皆日本の成功を疑へり。而して今や此一小国は着々其功を奉しつつある」と述べ、日本帝国軍隊の勇敢さを称賛し、既に戦場において殊功を樹てられた陸軍大将伏見宮貞愛親王殿下を諸君に紹介するのは光栄であると結んだ。親王はこれに対して、感謝の意を述べ、杯を挙げて総裁の健康を祝した²⁹⁾。

11月22日（滞在4日目）は、伏見宮貞愛親王は特別な祝典用の軍服を着てホテルを午前10時に出発し、博覧会会場で米国の5州の歩兵隊からなる美しいパレードを謁見した。次に輸送、機械、電気、農業館を視察し、日本のパビリオン（金閣寺）で12時から2時まで昼食を取った後、人類学の建物を訪問し、3時から5時までは博覧会婦人部長マーニング夫人が、親王を歓迎して開いたレセプションに参加された。在米日置代理公使によって開かれたセントルイスクラブでの夕食会は7時30分からであった³⁰⁾。

11月23日（滞在5日目）も伏見宮貞愛親王は、午前10時にホテルを出発し博覧会及び市中を御見物され、途中熱心な日本同情者で接待委員の1人であるスミス邸へ立ち寄った。午後9時セントルイス市長が、博覧会総裁、同理事、同事務官、各国事務官長、其の他紳士、淑女等来賓数百人になる盛大な夜会を開催した。招待客は伏見宮貞愛親王及び随員に握手を求め、雑談を試み、南山における親王の偉勲を激賞し、今回の戦争の日本対する同情を述べ、人皆感興に酔った。その後夜半セントルイス市長の案内でセントルイスクラブにおける舞踏会に臨まれた³¹⁾。この晩餐会の盛況について、伏見宮貞愛親王の米国滞在中常に随行した在米日置臨時公使は外務大臣小村に次のように報告している。「主人ノ用意来賓挙動共ニ頗ル親好ノ感触ヲ与ヘ我国ニ対スル當国民ノ感情が良好ナル原因ハ勿論ナリ 殿下ノ御人格モ亦タ結果」であり、同地有力家の一人が殿下を称賛して「殿下ハ其優美ナル御人柄ト御思慮アル御挙動ニヨリ『セントルイス』ノ人心ヲ全ク収獲セラレタリト語りタリ以テ殿下御渡来ノ結果ガ當国人民ノ友誼ニ更ニ一層ノ親厚加ヘタルノ一斑ヲ窺フニ足ルベシ。」³²⁾ 伏見宮貞愛親王のセントルイスでの行動は、写真とともに連日新聞紙上で詳細に紹介され、威厳のある軍服姿とともに文化的近代的印象を与えることに成功した。

11月24日（滞在6日目）午後12時30分伏見宮貞愛親王はフランシス総裁とセントルイス市長のお見送りを受けて汽車でセントルイスを出発された。フランシス総裁は、今最も日本

皇帝陛下の御側を離れられない身分である伏見宮貞愛親王が、日本から遠い博覧会に臨まれたことに謝意を示した。

11月25日フィラデルフィアに到着し、フィラデルフィアに5日間、ボストン及びニューヨークに13日間御滞在、シカゴに御二泊されサンフランシスコに向かわれた。この間各地で工場や商業会議所を見学し、11月26日には校長ハリソンの案内でペンシルバニア大学、12月3日にはエリオット総長の案内でハーヴァート大学、12月5日には総長ハッドレーの懇請によりエール大学を御巡覧された。ニューヨークでは我が国を世界で紹介したペリー（Matthew Calbraith Perry, 1794-1858）の孫ペリー・ペルモント夫妻の招待によりその邸宅に臨み晩餐の饗を受けた³³⁾。

4. 米国での反響

伏見宮貞愛親王は、セントルイスに到着した日の歓迎会で通訳を通して米国の印象について次のように述べた³⁴⁾。万博に関して「米国の進歩の記念碑であり大企画である」と賞賛した後、「私は20年前に米国に来たことがあるが、米国はマジックのように発展した。」と米国の進歩に驚きを表明した。そして、「米国人は世界で最も進んだ人々である。しかし日本もこの20年間美しく発展した。もし20年前の日本を知っている米国人が、もう一度日本に来たならば、日本の進歩に驚くだろう。」と、日本の近代化を強調した。

また、11月20日にセントルイスで評判の日本の演劇“The Daring of the Gods”を観劇された際には、伏見宮貞愛親王が3幕目終了時に主役の女優に会うことを強く望まれたため、極めて異例のことであるが女優の衣裳部屋へ親王の随員が警護しながら訪問された。手嶋事務官長が通訳され、伏見宮貞愛親王がステージ上の女優がとても小さく見えたので、大変驚き次のように述べた。「実際会うとあなたは本当にアメリカ人らしく大きい。しかし、ステージの上のあなたは、日本人のように小さく思えた。」この伏見宮貞愛親王の疑問に対し、女優は「それがマドンナの衣裳を着ている理由です。そしてこの作品に係っている全ての人の芸術のおかげです」と答えた。伏見宮貞愛親王は、席に戻り劇の最後のシーンでカーテンが降りるまで興味深く御覧になっていた³⁵⁾。

伏見宮貞愛親王は、米国の要人だけでなく万博女性委員会の女性や演技者と話をするなど様々な米国人と多くの交流を行い、親しみやすいイメージを創出していた。しかし、直接伏見宮貞愛親王とのインタビューを試みた記者は、東洋の伝統的皇族の姿を次のように報告している³⁶⁾。「伏見皇子はおそらく米国を訪れた東洋の貴族で最も先進的で国際的な人物で、多くの貴族がするように王服の後ろに隠れようとしなない。彼の挨拶は真心がこもっており、握手は強く、20年前の訪米の際習得された型にはまった作風である。」そして彼の衣服は現代的で礼儀作法は国際的であるが、多くの点で人目を引く東洋の物腰を残していると指摘している。特に記者を驚かせたのは、米国と大きく異なるインタビューの方法であった。伏見

宮貞愛親王へのインタビューは、以下のようになされた。

記者の名刺が皇子に渡されると、10分後に式武官が現れ、記者は応接間に通された。インタビューは、記者が質問を提出すると、式武官がその質問書を上階にいる皇子に届け、皇子から返事をもらって来る方式であった。記者は画家を同伴していたので、「皇子と直接会いたい」と訴えると、式武官は大変驚いて説明した。「伏見宮は日本の軍人として高貴な精神がある」ので、皇子に直接インタビューはできないし、「彼は日本についても、彼自身についても公の発言はできません。」と式部官は宣言した。

特に重要なことは、伏見宮は「非人格的な存在」であるため、彼の言葉を新聞や雑誌に引用することはできず、「式武官が伏見宮の考えを記者に与える」ことができるだけだと説明した。記者は米国では、インタビューは進んで受けられ、発言は引用される。伏見宮の声明が直に出されなければ、それは価値がないと抗議した。しかし日本では、「たとえ宮が望んでいても日本政府の許可がなければ、彼は公の発言はできない。」実際彼は歓迎会に出席し、滑稽な振舞いや天気について話すが、戦争や日本の公の関心事について言及すると、ただちに沈黙した。

記者は自由に万博や米国で感じたことや印象、たくさんの食べ物について話した中国の Pu Lun 皇子の例を出して抗議した。式武官は、「Ru Lunは軍人ではない」と答えた。日本では、軍人にとって軍の命令がすべてであった。伏見宮は偉大な軍人であり、血の戦場で全力で戦い勝利し、軍人として彼は成功した。「日本の観点からすると、彼は上手な話し手として成功したのである」と、記者は伏見宮に対する感想を述べた。皇族がセントルイス万博を訪れ、東洋にも西洋に匹敵する文明国があることを証明しようとした。皇室の伝統がない米国では、伏見宮の言動は注目され、西洋と類似した面よりも、西洋と異質な面に興味を持たれた。しかし米国が好奇心を抱いた日本の伝統は、日本にとって西洋より遅れた部分ではなく、西洋に誇示する分野であった。

伏見宮貞愛親王の海外渡航に常に付き添った佐藤愛麿によれば、親王の外国での振る舞いは次のように思慮深く且つ賢明であった。「聖旨を奉じて親王は再三外国へ渡航あらせられたが、毎時も国威を重んじ、慎重に考慮あらせられ、機に臨み変に応じて事の宜しきを制し給うた。³⁷⁾

5. おわりに

伏見宮貞愛親王は、セントルイス万博の観覧とルーズベルト大統領に日米友好を記した天皇の親書渡すために、日露戦争の最中に米国を訪問した。当時日本政府は、日露戦争において米国が同じ白人であり宗教も同じキリスト教であるロシアに味方することを杞憂していた。そのため日本に好感情を抱いてもらう目的をもって、セントルイス万博での皇室の役割を期待した。また、日本が列強に連なる近代化された国として認知されるためにも、欧州の

皇族と同様な扱いを受けることを重要視していた。

米国の大統領選挙は1904（明治37）年11月8日に投票が行われ、ウィリアム・マッキンリーの暗殺の後を受け、副大統領から大統領に就任した共和党の現職大統領セオドア・ルーズベルトが当選を果たした。伏見宮貞愛親王が米国に到着したのは、まさにルーズベルトの勝利が確定した直後であった。伏見宮貞愛親王は、1904（明治37）年11月9日にサンフランシスコに到着し、11月15日ワシントンでルーズベルト大統領と接見し、11月19日から24日までセントルイス万博を訪れ、その後米国内を旅行し、12月28日米大陸を辞去された。

聖路易万国博覧会本邦参同事業報告に「接待費ニ於イテハ日露開戦後米人其他本邦ニ対スル同情厚キ加ヘタルカ為ニ国際体面ヲ保ツ上ニ予想外ノ失費ヲ要スルコトノ止ムヲ得サルニ至リタルニ由リ」³⁸⁾と記載されている事からも、皇室外交が積極的に展開された事が伺われる。この皇室外交が、以下の文に見られるように米国の仲介による1905年のポーツマス条約に影響を与えた要因の一つになったと思われる。

「日露戦役中、親王の御渡米が如何に日米両国に興つて力があつたか。それは云ふまでもないことで、日露講和を議するに當り、米国が日本に対して常に好意的態度を持したのは様々な事情があつたらうけれど、御旅行中、親王が常に快活な麗しい態度を以て、胸襟を開いて交際場裡に立ち、米国上下に非常な良い印象を遺し給うたのが、その主要な原因の一となつて居たことは何人も認めて居るところである。」³⁹⁾米国の新聞は、伏見宮貞愛親王を「軍人であり政治家であり、外交官である。」⁴⁰⁾と評したが、まさに米国内での親王の振る舞いは日本の外交官であった。

セントルイス万博以降も皇室は万博に関わっていた。1905（明治38）年ベルギーで開催されたリエージュ万国博覧会には、有栖川宮殿下と同妃殿下が万博会場を訪問し、加藤公使御案内のもとに、ベルギー機械館、食料館及び兵器部に御立寄りしクルップ砲の出品につき説明を受け、参同諸国の出品御巡覧の後日本部にお越しになり、岡事務官長心得の御先導で場内隈なく御覧になった⁴¹⁾。1910（明治43）年イギリスのロンドンで開催された日英博覧会では、伏見宮貞愛親王が名誉総裁となられた。英国王室は開催地でもあったため両陛下を始め皇子、皇女、万博名誉総裁であるアーサー・オブ・コンノート親王殿下同妃殿下が万博会場を訪れ、スウェーデン国皇太子同妃殿下も訪れた。日本からは名誉総裁伏見宮貞愛親王伏見宮博恭王同妃殿下が訪れた⁴²⁾。

20世紀初頭の時代において日本の皇室と万国博覧会の関係は、外交上極めて政治的な意味を持ちながら続いていた。

注

- 1) 「江戸時代には、皇族の家つまり宮家は、伏見宮、桂宮、有栖宮、閑院宮家の四つしかなく、この四宮家が世襲親王家、四親王家と称された。」浅見雅男『皇族誕生』角川書店2008年、27頁。

- 2) 小沢英二「万国博覧会とオリンピック大会—1904年セントルイス大会での『人類学の日』をめぐる」『椋山女学園大学論集—人文科学篇—』第25号、1994年、35-45頁。畑智子「セントルイス万国博覧会における『日本』の建築物」『日本建築学会計画系論文集』第532号、2000年、231-238頁。渡辺かよ子「1904年セントルイス万国博覧会における『教育』」『愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部篇—』第3号、2003年、149-161.)
- 3) 久本明日香「セントルイス万博と清末中国」『寧楽史苑』第49号、2004年。
- 4) 伊藤真実子「1904年セントルイス万国博覧会と日露戦時外交」『史学雑誌』第112編第9号、2003年、66-86頁。
- 5) 多木浩二『天皇の肖像』岩波書店、1988年、80頁。
- 6) 「天皇の視覚化」については近年多数の論考がある。例えば、中山和芳『ミカドの外交儀礼—明治天皇の時代—』朝日新聞社2007年、3-9頁。前掲、多木浩二『天皇の肖像』83頁。
- 7) 「近代天皇像の展開」『岩波講座日本通史第17巻近代2』岩波書店1994年、228-238頁。
- 8) 『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』第二編、農商務省1905年、48頁。
- 9) 在米特命全權公使高平小五郎より外務大臣男爵小村寿太郎宛書簡「セントルイス博覧会ニ関スル件」1903（明治36）年6月30日受、機密公第35号、『北米合衆国ミゾラ州セントルイス市ニ於テ万国博覧会開設一件』外交史料館所蔵（1921）。
- 10) 在米特命全權公使高平小五郎より外務大臣男爵小村寿太郎宛書簡「有栖川宮殿下米國御來航ニ関スル件」1904（明治37）年4月7日受、機密第25号、『伏見宮貞愛親王殿下聖路易博覧会へ臨御一件』外交史料館所蔵（2601）。
- 11) *Scrapbook*, Vol. 12, p. 118, St. Louis Public Library.
- 12) 在米高平公使より小村外務大臣宛電信課文第169号、東京着1904（明治37）年8月9日、前掲。
- 13) 小村大臣より在米高平公使宛電送第3587号、1904（明治37）年9月23日発、同上。
- 14) 伏見宮家編『貞愛親王事跡』伏見宮家1931年、8頁。
- 15) 同上224頁。
- 16) 同上226頁。
- 17) 同上230頁。
- 18) 同上231頁。
- 19) 在米日置臨時代理公使より小村外務大臣宛電信課文東京着1904（明治37）年11月16日、第249号、前掲。
- 20) 前掲、『貞愛親王事跡』233頁。
- 21) 同上234頁。
- 22) 在米日置臨時代理公使日置益より外務大臣小村寿太郎宛書簡1904（明治37）年12月28日付機密第52号「伏見宮殿下御渡米ノ顛末」18頁、前掲。
- 23) 在米日置臨時代理公使より外務大臣小村宛電信課文華盛頓発1904（明治37）年11月21日、東京着同年11月22日、第253号、前掲。
- 24) *World's Fair Bulletin*, Vol. 6, No. 2, December 1904, pp. 39-40.
- 25) 「伏見宮殿下御渡米ノ顛末」21頁、前掲。
- 26) *Ibid.*, *Scrapbook*, Vol. 12, p. 138.
- 27) 前掲、伏見宮家編『貞愛親王事跡』238頁。
- 28) 「伏見宮殿下御渡米ノ顛末」22頁、前掲。
- 29) 前掲、伏見宮家編『貞愛親王事跡』239-240頁。

- 30) *Scrapbook*, op. cit., p. 131.
- 31) 前掲、伏見宮家編『貞愛親王事跡』241頁。
- 32) 「伏見宮殿下御渡米ノ顛末」23頁、前掲。
- 33) 前掲、伏見宮家編『貞愛親王事跡』243-244頁。
- 34) *Scrapbook*, op. cit., p. 135.
- 35) *Ibid.*, p. 113.
- 36) *Ibid.*, p. 134.
- 37) 佐藤愛麿『貞愛親王逸話』（貞愛親王事跡別冊）伏見宮家1931年、46頁。
- 38) 前掲、『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』46頁。
- 39) 前掲、『貞愛親王逸話』46頁。
- 40) *Scrapbook*, op. cit., p. 135.
- 41) 永山定富編「海外博覧会本邦参同史料（第五輯）」フジミ書房1997年、115頁。
- 42) 前掲、『海外博覧会本邦参同史料（第六輯）』98頁。